

埼玉県飯能市のエコツーリズムにおける計画と実態

Planning and Actual Program in Ecotourism of Hanno City, Saitama Prefecture.

スウ イジョウ
ZOU YICHENG

1. 序論

(1) 研究背景と目的

従来のマスツーリズムが観光地に与える悪影響が広く批判される中、各地域では自然環境や地域文化保全に配慮するエコツーリズムに取り組んでいる。

日本では、自然だけでなく文化も観光資源として、環境省が最初に提唱し、エコツーリズム推進会議の設置や「環境省エコツーリズム推進モデル事業」の実施などを通じて、国を挙げた推進が始まった。飯能市は2004年に「里地里山型」モデル地区として選定され、その後、エコツーリズム全体構想を策定し、全国第一号の「認定エコツーリズム推進地域」として20年間、エコツーリズムに取り組んでいる。

エコツーリズムに関わる研究は、ガイドツアー、ステークホルダー、地域の問題点、エコツアーの効果、経済と環境の調和、利用資源など多角的に取り組まれているが、利用資源の研究では特定資源だけに注目することが多く、地域における全ての資源を対象とし、利用実態の変遷をみた研究はない。また、飯能市で策定されている観光およびエコツーリズムの計画であり、それぞれ既に3回改訂されている観光ビジョンとエコツーリズム推進全体構想についても、内容の検証と実態の関係をみたものはない。

本研究は、飯能市を対象に、①観光ビジョンにおける観光の方向性とエコツーリズムの位置づけおよび、エコツーリズム推進全体構想におけるエコツーリズムの方向性の変遷、②飯能エコツーリズムにおいて、今まで実践されてきたエコツアーと活動団体の変遷を把握し、③観光とエコツーリズムの計画の変遷と関係、④資源活動と実施団体の変遷、⑤各計画と実態の関係を考察することを目的とした。

(2) 研究方法

まず、飯能市における観光計画の方向性とその変遷を把握するため、「飯能市観光ビジョン」と「飯能市エコツーリズム推進全体構想」（以下、全体構想）から保護資源と利用資源を把握し、方向性の変遷をみた。また、エコツーリズム計画策定への、実施団体の参画状況も把握した。

次に、飯能市エコツーリズムにおいて利用資源と活動を把握するため、2015年から発刊されている「飯能エコツアーチラシ」を対象とし、各ツアーの実施年月日、ツアー名、実施団体、実施場所、概要を整理した。利用資源および活動は、テキストマイニングのツールであるKH Coderを利用し、概要に基

づく抽出語リストを確認しながら、それぞれの特徴語をグループ化（コーディング）した上で、段落を単位として階層的クラスター分析を行なった。

2. 計画書における地域資源の利用と保全

観光ビジョンでは、地域資源に対する保護施策は見られなかった。特定の資源利用から資源への付加価値、地域全体の取り組みへと方向性が変わるにつれ、利用対象とする個別の資源は増え、面的な環境へと変化していた。一方、全体構想では、基本方針や利用対象とする資源に変化はなかった。両計画書ともに、伝統行事・林業・農地は一貫して重要な地域資源と認識されていた。観光ビジョンでは、森林・水系・文化財が利用対象資源に追加されたが、植物・信仰・動物・地形は利用の対象としていなかった。

全体構想の策定に参画した団体は、第一版・第二版で木材活用団体が最多であり、森林や林業の利用施策が頻出したが、第三版では1社のみが参画していた。一方、観光関連業界団体である飯能商工会議所と奥むさし飯能観光協会が全てに参画していた。

また、全体構想において、多くの地域資源が同程度利用対象とされていたが、保護対象が特定資源（植物・動物・水系・森林）に偏重し、森林や林業に関する保護施策が少ないことから、保護がエコツーリズムと十分に結びついていない可能性がある。

3. 飯能市エコツーリズムにおける実態と特徴

2004年の開始以降2013年まで増加し、2020年のコロナ禍まで減少傾向を示したが、コロナ禍以降再び増加に転じた。この動向は実施団体と団体種数の変化と一致している。

名栗地区が最も多く（総件数の22%）、飯能地区、吾野地区、東吾野地区でも比較的多く実施されたが、精明地区、加治地区、南高麗地区、原市場地区では各5%未満に留まった（図）。

資源と活動をタイプ分類すると、【無形文化】【歴史的街並み】【山歩き】【自然地】【自然観察】【水系活動】【森林文化】【地区特化】【飲食体験】【農業体験】【日常生活体験】と分けられた（表）。

【日常生活体験】が常に過半数のエコツアーでみられ、【自然観察】と

【地区特化】はそれぞれ約5割と2割のエコツアーで増加傾向を示したが、他のタイプは増減を繰り返



図 飯能市における8地区

返した。また、「活動市民の会」以外の団体種では、過半数のエコツアーで【日常生活体験】がみられた一方、「活動市民の会」では、【山歩き】【自然地】が過半数のエコツアーにみられた。「エコツアー事業者」や「木材活用団体」など、森林・林業に関する実施団体種は【自然観察】や【森林文化】を中心としたエコツアーを実施し、それ以外の「事業者」や「業界団体」に比べてレジャー的要素を含む【飲食体験】【山歩き】が少ない。また、「業界団体」のエコツアーには【自然観察】【森林文化】が少なかった。【森林文化】は「木材活用団体」のエコツアーだけに多かった。市民団体を比べると、「活動市民の会」は市民団体の資源活動に、【歴史的街並み】を加えたエコツアーを実施している。一方、「その他市民団体」のエコツアーは、【歴史的街並み】【日常生活体験】といった文化要素を中心としており、【山歩き】は少なかった。

表 資源活動タイプ

資源活動タイプ名	内容	件数	ツアーに占める割合
【無形文化】	信仰・伝統行事	216	15%
【歴史的街並み】	町内・文化財・建築・歴史	411	28%
【山歩き】	移動・山岳	468	32%
【自然地】	植物・地形	218	15%
【自然観察】	自然環境・見学・動物	705	48%
【水系活動】	水系・アウトドア	220	15%
【森林文化】	森林・林業	180	12%
【地区特化】	地区	192	13%
【飲食体験】	料理・飲食	674	46%
【農業体験】	農地・特定期間	241	16%
【日常生活体験】	生活・体験・小物	961	65%

4. 飯能市エコツアーに関する計画と実態の関係

【日常生活体験】は常に過半数のツアーで見られ、各計画でも利用対象となっていた。全体構想第一版策定後、多くの資源活動タイプ（【無形文化】【日常生活体験】【自然観察】【自然地】【森林文化】【農業体験】）は増加傾向を示したが、観光ビジョン（第一期と第二期）や全体構想（第二版）後には顕著な増加は見られなかった。観光ビジョン（第二期）で利用対象ではなかった【自然観察】が過半数のエコツアーに、第三期では【自然地】が増加傾向を示した。

5. まとめ

(1) 総合考察

観光ビジョンと全体構想は、文化遺産や不動産、基幹産業などの資源（伝統行事・森林・林業・農地・水系・文化財）は共通資源とされたが、植物・信仰・

動物・地形は全体構想でのみ利用の対象とされた。観光ビジョンでは利用対象資源が各期で変化したが、全体構想は第一版から第三版まで変更がなく、両計画に関連性は乏しいと考えられる。

少人数で実施されるエコツーリズムは、観光ビジョンにおける交流人口の目標値への貢献というよりも、飯能における多様な資源を利用の対象とする点で貢献すると考えられる。観光ビジョンと全体構想では、伝統行事・林業・農地に注目しているものの、実態ではこれら資源を活用する割合は低く、計画の有効性には課題が残る。

飯能市は歴史的に林業が盛んであるが、中岡（2018）および平井（2015）が既に指摘しているように、実態において【森林文化】は十分に活用されていない。また、現在では木材活用団体が計画策定に参加しておらず、【森林文化】の活性化は依然として課題が残される。一方、【森林文化】【自然観察】をエコツアーに組み込んでいる、森林・林業に関わる実施団体種のエコツアーではレジャー的要素が乏しく、それ以外の団体では自然や森林を利用したエコツアーが少ない。林業に関わるエコツアーは木材活用団体のみが実施しており、林業と他産業との連携によるエコツアーの展開が求められる。また、「活動市民の会」以外の市民団体では文化的要素を中心としたエコツアーが多く、森林文化都市を意識したエコツアーの推進が期待される。

また、中岡（2018）と谷地（2008）が既に指摘しているように、【日常生活体験】が一番多いことと実施場所には地域差があった。

観光ビジョンとエコツアーの実態には乖離が見られた。これは、観光ビジョンが面的に資源を捉えることが一因と考えられるが、特定の種や信仰なども利用対象と捉えることが求められる。

(2) 提言

飯能エコツアーをより包括的に発展させるために、エコツーリズムにおいて保護の対象とする資源を限定せず、業界団体や事業者にもガイド勉強会に参加してもらい、エコツアーの実態を計画に反映させ、高頻度の【日常生活体験】【自然観察】と低頻度の【森林文化】【水系活動】の連携を図る必要がある。

Abstract: This study explores ecotourism in Hanno City through literature review and text mining. It examines the relationships between plannings; resource and organization; planning and current situation. Findings reveal no strong correlation between planning documents and a lack of integration between resource use and protection. Forestry-related ecotourism plans often omit recreational elements like culinary experiences and mountain climbing. Additionally, discrepancies exist between the Hanno Tourism Vision and actual ecotourism conditions. To foster the future development of ecotourism in Hanno City and across Japan, it is essential to develop targeted strategies addressing the issues identified in this study.